



《信仰、理性の完成》

フランчесコ・カッセーゼとダヴィデ・プロスペリのスピーチ
コムニオーネ・エ・リベラツィオーネのイタリア・ロンバルディア州の
成人のための「年度始めの日」

於：メディオラヌム・フォーラム、アッサーゴ（ミラノ） 2023年9月23日

《信仰、理性の完成》

フランチェスコ・カッセーゼとダヴィデ・プロスペリのスピーチ

コムニオーネ・エ・リベラツィオーネのイタリア・ロンバルディア州の成人のための「年度始めの日」

於：メディオラヌム・フォーラム、アッサーゴ（ミラノ） 2023年9月23日

ダヴィデ・プロスペリ

ヨハネ福音書の中で、御子が栄光を受ける時にイエスが御父に語りかける言葉《聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。[...] 真理によって、彼らを聖なる者としてください。あなたの御言葉は真理です。わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです。また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、お願いします。父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。あなたがくださった栄光を、わたしは彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります》¹は、わたしたちが今日ここで共に新年度を始める深い理由を思い起こさせます。

わたしたちのいのち・人生・日常の中で唯一キリストの声に絶えず耳を傾けさせることを可能にする聖霊の働きを願い求めましょう。

Discendi, Santo Spirito

フランチェスコ・カッセーゼ

ようこそ、ここに集っていることに感謝します。ミラノの会場にいる皆さん、そしてロンバルディア州の各都市からオンラインで参加している皆さんに挨拶します。

本日は2つの短い前提から始めたいと思います。

まず、今日の講話の内容は1カ月前にラ・トゥイールで開催された国際責任者会議でのダヴィデによる「導入」と「まとめ」を基にしたものです。この講話は、わたしたちが数人の責任者たちと共にこの一年、多くの時間を費やして行ってきた「しごと」の成果であることを強調したいと思います。その「しごと」の要点は《キリスト教的経験》、一般的な経験と、特にキリスト教的経験でした。それは、ジュッサーニ神父にとって、生活と信仰に対する独自のアプローチにおいてとても大切な意味を持つ側面で、彼はわたしたちの運動の始めから細心の注意を払ってきました。わたしたちはこの「しごと」ができたことにとっても感謝しています。

二つ目に強調したいことは、今日そして今後、イタリアの各地と運動が存在する各国で、「年度始めの日」が開催されることです。その地域の責任者の判断によっては、今日ダヴィデがわたしたちに提案

¹ ヨハネ 17,11.17-23

する内容を取り上げるとともに、それぞれの共同体の人に証ししてもらいます。

プロスペリ

一つ付け加えたいと思います。今言われた方法を選んだのは、わたしと共に運動の責任を負って協力してくれる人々を生かし、さまざまな場所で参加するすべての人々の間に具体的な交わりを育むためです。さらにそれは、わたしたちの歴史の現段階においてわたしに託された任務を通して、よりはっきりと自覚し始めた配慮と情熱、つまりわたし自身が皆さん一人ひとりに対して抱いている配慮と情熱を表現する方法でもあります。ジュッサーニ神父がいつもわたしたちに語っていた父性、わたしたち一人ひとりに求められている父性は、さまざまな形で実現され生きることができるものです。ジュッサーニ神父が1999年のフラテルニタの黙想会を締めくくった言葉《だからこそ、わたしはここにあなた方に挨拶に来たかったのだ。あなた方が父親の経験、父親と母親の経験ができるように願う。あなた方の共同体のリーダー、責任者の一人ひとり、そしてあなた方一人ひとりが、彼らよりまさっているという気配をかもし出すのではなく実際の無償の愛を持って、自分のそばにいる友人たちにとって父親、そこにいる人々にとって母親になるべきなのだ。主によって父親と母親にされたと感じる男女ほど、幸運で幸せな人はいない。出会うすべての人の父親、母親になることだ》²を思い出します。

講話に入る前に、歌を二曲、一緒に歌いましょう。

Se tu sapessi (A. Anastasio)

The Things that I See (R. Veras-R. Maniscalco)

《親愛なる皆さん、あなたがたのカリスマという貴重な贈り物とそれを守るフラテルニタを大切にしてください [...] なぜなら、カリスマはまだ多くの人生を“開花”させることができるからです。あなたがたのカリスマは、まだまだ発見されるべき可能性を多く秘めています。発見されるべきものがたくさんあるのです。》³

これは、わたしたちが一年足らず前に教皇から受けた心からの招きです。わたしたちがスクオラ・デイ・コムニタをもう一度最初から、『宗教心』からやり直すことに決めたのも、この招きがあったからです。そして、その道のりの中で、わたしたちは、わたしたちのカリスマの教育的提案の柱であると言うことのできるいくつかの基本的な言葉の内容と意味を、当然のこととして受け止めていたことに気づきました。たとえば、心の無謬性というテーマと、それを構成する根源的な要求や明白な事実との一致、そして何よりも、根本に立ち返れば、経験の問題です。

他方で、わたしたちはフラテルニタの黙想のテーマを信仰にしました。ジュッサーニ神父が示す意味における経験と、キリスト教信仰との間にはどのような関係があるのでしょうか？これから先の数ヶ月に行う「しごと」において、この問いに答えるべく互いに助け合いたいと思います。ですから、わたしたちは真剣にそして謙虚に、つまり、「しごと」に取り掛かる前にすでに理解していると思いつくのではなく、ジュッサーニ神父の教えとの照合を再び行う必要があるということです。それは、沼地を進むように、歩いて来た道が消されてしまうという意味ではありません。むしろわたしたちがすでに生きている経験の源に立ち返り、その意味と価値とを深め、常に生じる新しい状況から、もちろん道中で遭

² L. Giussani, *Dare la vita per l'opera di un Altro*, Bur, Milano 2021, p. 192. 逐語訳

³ 教皇フランシスコ, *あしあと* 26, 2023年春号, p. 14.

遇する困難からも刺激を受けることを意味するのです。

わたしたちに託されたカリスマは、教えの一形態であると同時に、その教えを表現し、活気づける新しい生き方です。その生き方とは時間と空間の中でキリスト教信仰の体験を刷新することであり、キリストの事実がわたしたちの人生に入り込み、わたしたちのドアを叩く今この時に適した魅力的で説得力があるという特徴を持っています。

それでは、これから数カ月間の「しごと」をより実りある有益なものにするために、「経験」という要素に焦点を当てたいと思います。

1. 中心である経験と信仰との関係

経験の概念

まず、教会の伝統に完全に内在するジュッサーニの教育的提案の中心である経験の概念を完全に把握するためには、一般的に考えられている経験の概念を広げる必要があります。ジュッサーニが *Il rischio educativo*(教育のリスク)の中で、教育にとって不可欠で基本的な役割として伝統との結びつきを位置づけているのは偶然ではありません。その結びつきがなければ、わたしたちは必然的に《抑制することができない本能（自分たちの衝動）と権力に振り回されてしまう》⁴と彼は言っています。

経験が基本的な役割を果たすと認識されるのは最初から明らかでした（1950年代後半のことです）。ジュッサーニが、キリスト教を経験、出会い、「事実」⁵として、またキリスト教の提案を確認する場としての経験⁶について強く主張していたことはよく知られています。後年、経験はすべての真の認識において必然的な出発点であることが明確に強調されています。（《人間は経験からしか出発できない。それは現実があらわになる場だからである》、《認知可能になる場》⁷）。

経験について、1963年にジュッサーニに宛てた手紙の中で、当時のモンティーニ枢機卿はいくつかの懸念を表明しています。《わたしは特に、キリスト教の真理の源としてのキリスト教的経験について言及します。教育学的方法としては、教師がそれを指導し、若者の心に、真理と価値観の客観的尺度を理解させる方法を知っていれば、それはそれで結構かもしれません。しかし、絶対的なものとして理論化された経験の優位性は許されるものではなく、また、その方法において未熟な信奉者たちは、その経験に不正確な教義的表現を与える可能性があります》⁸。モンティーニ枢機卿は、ジュッサーニのものではないにもかかわらず、一部の人々によってジュッサーニのものとしてされている立場を引用して自分の懸念を表されています。

⁴ L. Giussani, *宗教心*, ドンボスコ社, 東京 2007, p. 148

⁵ L. Giussani, «Come educare al senso della Chiesa» (1960), in Id., *Porta la speranza. Primi scritti*, Marietti/820, Genova 1997, pp. 7-8 参照

⁶ L. Giussani, *Porta la speranza*, op. cit., 以外に L. Giussani, *Il cammino al vero è una esperienza*, Rizzoli, Milano 2006, 1959年, 1960年, 1964年に書かれた文章が掲載されている; Id., *Il Movimento di Comunione e Liberazione (1954-1986). Conversazioni con Robi Ronza* (1987), Bur, Milano 2014 参照

⁷ L. Giussani, *L'autocoscienza del cosmo*, Bur, Milano 2000, pp. 274, 287. 逐語訳

⁸ G.B. Montini citato in A. Savorana, *Vita di don Giussani*, Bur, Milano 2014, p. 299. 逐語訳

この書簡を受け取ってから数ヵ月後、ジュッサーニはモンテーニ枢機卿の懸念に答える形で『*L'esperienza (経験)*』という小冊子を作成し、ミラノ教区の検閲官であったカルロ・フィジーニ司教の認可を得ました。数ページの小冊子ですが、内容は非常に濃いものです。1964年には、その一部、キリスト教的経験に関する部分が『*Appunti di metodo cristiano (キリスト教の方法に関するノート)*』として再出版される一方、1977年には『*Il rischio educativo(教育のリスク)*』の中で、『*Struttura dell'esperienza (経験の構造)*』というタイトルで全文が再出版されました。そこでジュッサーニは、自分の経験における概念を提示すると同時に、二つの批判を行っています。彼は、経験を判断の伴わない試みに矮小化することを否定し、経験を内面主義、内部主義、主観主義に矮小化すること、つまりプロテスタントや近代主義に矮小化することを否定するのです。

最初の批判について、ジュッサーニは《経験を特徴づけるのは、単に行うこと、つまり機械的な事実としての現実との関係を確立することではない。それは“経験する”という常套句に潜む誤りであり、この場合の“経験”は“試みる”と同義語である。経験を特徴づけるのは、何かを理解すること、理解したいことに意味を見出すことである。したがって経験には、物事の意味を理解することが含まれている。そして、一つのものの意味は他のものとのつながりの中で見出される。よって経験するとは、あるものが世界の中で何のためにあるのかを見出すという意味である》⁹と述べています。

ジュッサーニ神父は、経験があつて“それから”それとは別に判断があると言うような、経験の概念を提示していません。彼の言う経験は判断を含み、暗示し、判断によって特徴づけられるというものです。判断は経験の重要な要素なのです。『*宗教心*』の中で、『*確かに経験とは、何かを“やってみる”ことなのであるが、それよりもまず、経験したことに下される判断が重要なのである*』¹⁰と述べています。他の文章では、経験とは『*判断を伴う試み*』¹¹であると述べています。ここまでは、経験一般について話をしてきました。

キリスト教的経験

二つ目の批判（経験の主観主義的矮小化の否定）は、1963年に出された小冊子の第二部で展開され、ジュッサーニはキリスト者の経験に焦点を当てています。このテーマについて書かれている箇所は、非常に本質的であり、明確かつ簡潔に表現されているので全文を引用する価値があると思います。

《キリスト教的経験、教會的経験は、3つの要因から生じる極めて重要な行為の統一として出現する。

a) その経験をする人とは根本的にかかわりのない客観的な事実との出会い。その事実の具体的な姿は、他のあらゆる人間の現実と同様に（目で見て、手で触れて、話すことを聞くことができる）感覚的に裏付けられた共同体である。その共同体は、その指導者（権威）の声を通して発せられる判断と指示が基準となり、形作られる。たとえ内面的であっても、最終的に一つの共同体との出会いと権威に言及することのないタイプのキリスト教的経験は存在しない。

b) その出会いの意味を適切に認識する力。人間の意識の洞察力を超えているため、遭遇した事実の価値を適切に理解するためには、神からの働きも必要である。実際、キリスト教の出来事において神が人間にご自身を現されることは、意識の認知能力をも高め、人を挑発する異例な現実に人間のまなざし

⁹ L. Giussani, *Il rischio educativo*, Rizzoli, Milano 2014, pp. 126-127. 逐語訳

¹⁰ L. Giussani, *宗教心*, 前出, p. 18

¹¹ L. Giussani, *L'attrattiva Gesù*, Bur, Milano 1999, p. 316. 逐語訳

の鋭さを適応させる。これは*信仰の恵み*と呼ばれる。

c) 遭遇した「事実」の意味と自分の存在—キリスト教的、教会的現実と自分自身—の意味との間の、「出会い」と自分の運命との一致の意識。経験という現象に不可欠な自己の成長を確認するものは、この一致の意識である》¹²。

この3つの要素によって、わたしたちはジュッサーニのキリスト教的経験の概念に直面することになり、これはすでに言及されている経験を矮小化から救います。

要点を繰り返すと、つまり、客観的な事実（共同体や権威）との出会い、その事実の意味の認識（信仰の恵み）、キリスト教的・教会的現実であるその「事実」と自分自身との一致の関係の認識（つまり確認）、これらの要素のいずれかがなければ、その全体性と真正性は損なわれてしまうので、「キリスト教的経験」と言うことはできないのです。

2. 経験と信仰の関係

信仰のダイナミズム

‘*Si può vivere così?* (人はこのように生きることができる?)’と‘*Si può (veramente?!) vivere così?* (人は(本当に?!))このように生きることができる?)’の中で繰り返される、キリストへの奉獻生活の歩みを始めた若者たちとの対話で、ジュッサーニはキリスト教の信仰のダイナミズムについて、《信仰がどのようにして生じるのか》、《どのように生じ、人間的に、つまり理性的に証明されるのか》¹³の説明を提案しています。

そのことに導くために、彼は理性が用いる認識の方法としての信仰について長い前置きをします。実際、理性には《直接見えないもの、直接見ることのできないもの》を知るための方法があります。つまり、それらは《他人の証言によって知ることができる》というものです。それは《仲介による間接的認識(知識)》¹⁴、あるいは「信仰による認識(知識)」と呼ばれるもので、モラルによる確信の方法によって、証人が信頼に足るという判断に達しているのであれば、直接得られる知識に劣らず確実なものです。《もし[誰かが]、ある人についてその発言には信憑性があり、自分を欺くつもりはないと確信するに至ったなら、論理的には信頼しなければならない。信頼しないのであれば自分自身に逆らうことになるからだ》¹⁵したがって、わたしはアメリカに行ったことがないにもかかわらず、他の人の証言によって、アメリカが存在するという確信を理性的に主張することができます。文化、歴史、そして人間の共存は、このような知識の上に成り立っているのです。

ジュッサーニはこれを前提として、聞き手に向かって《キリストはわたしたちの信仰の総体的な対象である。人生の犠牲すべてをキリストに委ねることができるほど、キリストを知るにはどうすればいいのだろうか。》当然《理性によって用いられる方法のうち、ここで適用されるのは信仰である。わたし

¹² L. Giussani, *Il rischio educativo*, op. cit., pp. 130-131. 逐語訳

¹³ L. Giussani, *Si può vivere così?*, Bur, Milano 2009, p. 71. ジュッサーニはここで‘キリスト教の主張の起源に’（ドンボスコ社、東京 2015）の特に3章～7章の内容を取り上げています。

¹⁴ Giussani, *Si può vivere così?*, op. cit., p. 26 逐語訳

¹⁵ 同上, p. 41 逐語訳

たちは、証拠によっても、経験の分析によっても、キリストを直接には知らない。》¹⁶要するに、わたしたちは信仰によってキリストを知るのです。

それでは、キリスト教の信仰のダイナミズムに入りましょう。

a) ジュッサーニはそれを説明するために、この問題が歴史の中でどのように生じたか、つまり、ヨハネによる福音書¹⁷の、アンデレとヨハネのナザレのイエスとの**出会い**が記されている箇所まで遡ります。これは、キリスト教信仰の歩みにおける最初の要因です。《キリスト教の信仰の最初の特徴は事実から始まる、つまり、出会いという形をとった事実から始まるのである。》¹⁸そしてこのことは、これから思い起こしていく道のりの他のすべてのステップと同じように、今日のわたしたちにも当てはまるのです。

b) 第二の要因は、その**事実の異例的な性質**です。アンデレとヨハネの前にいた男は《異例な存在》だったのです。さもなければ、出会った数時間後《わたしたちはメシアを見つけた》と、彼が自分自身について言った言葉を自分たちのものとして、他の人々に繰り返えすことができたでしょうか。ジュッサーニにとって《異例》とは、人間の心の本来の要求に一致する（応える）ことを意味します。《異例な男を見つけるということは、あなたが望むもの、正義、真実、幸福、愛…の要求に応えるものを実現する人を見つけるということである。それは普通に起こってもいいはずだが決して起こらないのだ。不可能で想像にも及ばないのである。》この意味で、ジュッサーニは《異例的とは神聖と等価である。神聖、心に応えるものは「神」だからである。真に異例なものは神聖なものである。つまり、神聖な何かをその内側に秘めているのである》¹⁹と強調します。

c) 第三の要因は**驚き**です。《キリストへの信仰が始まる事実、ヨハネとアンデレの信仰のもとになった出会いは、[…] 彼らの中に大きな驚きをもたらした。》この二人と、イエスが行った場所に最初に同行したの数人の人たち、それからイエスに出会ったすべての人々の中に、抑えがたい驚きが生じたのです。彼らは、彼が話していたこと（《今まで、あの人のように話した人はいません》）においても、行い（奇跡、現実に対する力、善良さ、人間の心をあらわにするまなざし…）においても比類のない人物を目の当たりにしていたのです。《しかし、ひそかであっても、驚きとは常に問いかけである》²⁰その問いはある時点で爆発するのです。

d) 第四に、《この人は一体何者なのか》という矛盾した問いが持ち上がります。矛盾しているというのは、イエスについて、《彼らはすべてを知っており、彼が誰であるかもよく知っていたが、彼のやり方、振る舞いはまったく異例であった》からです。そのため《彼の友人であった人々は“この人はどこから来たのか”と言わずにいられなかった》のです。ジュッサーニは、《信仰は、まさに“この人は一体何者なのか”という問いから始まる》²¹と述べています。

e) 第五は、**彼の答え**²²です。“この人は一体何者なのか”という問いは避けられないものですが、答える

¹⁶ 同上, p. 42 逐語訳

¹⁷ ヨハネ 1,35-51 逐語訳

¹⁸ L. Giussani, *Si può vivere così?*, op. cit., pp. 45-46. 逐語訳

¹⁹ 同上, pp. 46, 48-49 逐語訳

²⁰ 同上, p. 49 逐語訳

²¹ 同上, pp.52-53

²² ジュッサーニは『*Si può vivere così?*(人はこのように生きることができる?)』で信仰の道のりについて、展開した5つのポイントを『*Si può (veramente?!) vivere così?*(人は(本当に?!)このように生きることができる?)』では、6つのポイント

このできない問いです。イエスが本当は誰であるかは、わたしたちだけでは答えることができず、その正体（その神性）は理性では把握しかねるのです。福音書は、カイザリア・フィリピの近くで起こったエピソードを記しています。イエスは、彼に従っていた数人の人たちとともにいました。そして、突然の思いにとらわれ《人々は、わたしのことを何者だと言っているか》²³と問い、わたしたちが知っている答えの後、イエスは弟子たちに向かって《それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか》と問うとペトロが衝動的に《あなたはメシア、生ける神の子です》²⁴と答えます。この答えについてジュッサーニは何度かペトロは《多分、イエス自身から聞いた言葉—意味は明確に捉えていなかっただろうが一繰り返し返した》²⁵と述べています。そして、《シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ》²⁶とほめます。それはまさに人間の理性を超える答えでした。《理性はキリストの神性を証明できない。なぜなら、人間の現実の中にひとりの人として存在する神性は、理性の対象にはならないからである。理性は、何か異例なものに直面しているという事実に到達することはできるとしても、自らを人間に伝える神としてのイエス・キリストが誰であるかをとらえることはできない》²⁷ので、ペトロは《あなたがそう言われたので、わたしたちはあなたが神であることを知っています》²⁷と言うしかなかったのです。イエス・キリストが誰であるかという問いに対する答えは、イエスのものです。ペトロはイエスが自身について言うことを《信じる》²⁸のです。どうしてイエスを信じることができたのでしょうか。ペトロと他の人々にとって、最初の出会ってから、来る日も来る日も、イエスに従い、イエスと一緒にいることで、一つのことが他のどんなことよりも明白になっていたのです。それは《「彼」を信頼するべきだ、と。“この男が信頼できないなら、自分の目さえも信じられない”》²⁸ということです。

f) 第六のポイントは、事実を前に問われるわたしたちの責任（《「はい」と言う勇氣》²⁹）です。《“この人は一体何者なのか”という問いとペトロが示す答えを前に、人は「イエス」か「ノー」と言うことができる。すなわち、ペトロの言うことを受け入れるか、他の皆が立ち去ったように立ち去るかのどちらかだ。》³⁰ ペトロの答えは信仰による答えです。《信仰は、「彼」がそう言ったから、それを肯定する。それに尽きる。》そして、《主が言われたから、人がそれを受け入れるというのは、「彼」の行動の異例さ、パフォーマンスの異例さが歴史的に把握可能であり、他のどこにも見いだすことのできないもの

に細分化しているので、わたしはそれをここで採用します。実際彼は《第4の要因は“この人は一体何者なのか”というわたしたちの問いであり、第5は「彼」の答えである。なぜなら、わたしたちは「彼」が神であることを証明することができないからだ。（わたしたちにはあの問い、避けられない必然的な問いに辿り着くしかない。哲学者も、数学者も、それに答えられるものは誰もいない。しかし、もしわたしがその問いを発しないのであれば、これまでわたしにとって明白であったことを否定しなければならなくなる。つまり、明白な事実に背くことになる。）よって第6の要因は「はい」という勇氣、つまり、わたしたちにかかわるのはこれに答える勇氣である》*Si può (veramente?!) vivere così?*, Bur, Milano 2020, p. 140. 逐語訳

²³ マルコ 8,27

²⁴ マタイ 16,15-16

²⁵ ルイジ・ジュッサーニ、*キリスト教の主張の起源に*、ドン・ボスコ社、東京 2015, p.98

²⁶ マタイ 16,17

²⁷ L. Giussani, *Si può (veramente?!) vivere così?*, op. cit., pp. 94-95, 93. 逐語訳

²⁸ 同上, p. 118 逐語訳

²⁹ 同上, p. 140 逐語訳

³⁰ L. Giussani, *Si può vivere così?*, op. cit., p. 55 逐語訳

である限りにおいて、理性的である》。³¹むしろ、ジュッサーニは《いや、唯一理性的なのは「イエス」だけである。それは、なぜか?》と強調しています。なぜなら、キリストは《わたしたちのどんなイメージよりも心の本質に一致し、わたしたちの生きる理由である幸福への渇きに一致する》³²からです。一方、「ノー」は常に先入観から生まれ、イエスがあなたの望むことを妨げるつまずきとなることから生まれる》³³のです。

2000年後、わたしたちはまったく同じ状況に置かれています。ペトロたちがナザレのイエスという人物と、その異例性と向き合わなければならなかったように、わたしたちもイエスの証人という人間的現実と、キリストが現在の出来事となる教会と向き合わなければならないのです。ある特定の人、ある特定の共同体、ある特定の生き方に出会うとき、わたしたちの中にも、心の根源的の要求との一致を経験することによって驚きが生じ、その驚きは《どうしたらこのようになれるのか》という問いに変わっていきます。そして、わたしたちの理性と自由のすべてをかけて共に生きる過程で育まれた証人への信頼によって、教会の現実そのもの、出会ったキリスト者の仲間によって伝えられたペトロの答えを認め従う方向に心が開き成熟していくのです。

では、ペトロの認識はどのようにしてわたしの認識となるのでしょうか? 当時のように今も、遭遇する人間のうちにある神聖は、理性では知ることができません。なぜなら、信仰の対象（人間の中に現存する神聖）を成すものは、理性に適した通常の対象を超えているからです。《キリストの存在が認められるのは、キリストが個人を“克服”するからである。つまり、人間と世界に信仰が生じるためには、まず、恵み、純粋な恵みである何かが起こらなければならない。すなわち、キリストの出来事、キリストとの出会いである。その出会いの中で、人はその出会いがなければ起こりえない異例さを経験するのである。》³⁴

ジュッサーニは‘*Generare tracce nella storia del mondo (世界の歴史に痕跡を残す)*’の中で、信仰は《キリスト教の出来事の一部である。なぜなら、その出来事が表す恵みの一部であり、恵み自体の部分であるからだ。[...] キリストが現在の出来事においてわたしに自身を与えるように、キリストはわたしのうちに、「彼」をとらえ認識する能力を生き生きとさせる。》しかし、相関的にわたしたちの自由は、キリストを認識することを願い、受け入れるよう求められます。わたしたちにもかかっています。《人間の自由は、“すべてが恵みであることを受け入れて、わたしはあなたに恵みを求めます”という問いに集約される。こうして、すべてが恵みであるという事実も、キリストの恵みの効力がわたしの自由に依存しているという事実も、完全に保たれる》³⁵のです。

それゆえ、今起こること、たとえそれがもっとも驚異的な奇跡をじかに経験したとしても、それだけ—「それだけ」を強調します—では、わたしたちの誰も、キリストについての確信、キリストの神性、神の子であることの確信に到達することはできません。

これまで述べて来たことの要点をまとめるために、ヨハネの福音書に記されている、生まれつき目の見えない人（今年の「年度始めの日」のために選んだ絵画にある）のエピソードを思い起こしてみまし

³¹ L. Giussani, *Si può (veramente?!) vivere così?*, op. cit., p. 94 逐語訳

³² 同上, p. 143 逐語訳

³³ L. Giussani, *Si può vivere così?*, op. cit., p. 57 逐語訳

³⁴ L. Giussani – S. Alberto – J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, Bur, Milano 2019, p. 43 逐語訳

³⁵ 同上, pp. 44, 47 逐語訳

よう。イエスが彼の目に泥を塗ったとき、生まれつきの盲人がした経験は、見えなかった目が見えるようになったことです。しかし、イエスが神の子であるかどうかは、じかに経験した生まれつきの盲人の男でさえ、判断することはできなかつたのです。《ユダヤ人たちは、盲人であった人をもう一度呼び出して言った。「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。」彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、[以前は]目の見えなかつたわたしが、今は見えるということです。(ヨハネ 9,24-25)》ここでは、じかにした経験がそう言わたのです。そして、ファリサイ派の人々の反論に答えて、《あの方がどこから来られたか、あなたがたがご存じないと、実に不思議です。あの方は、わたしの目を開けてくださったのに。神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。生まれつき目が見えなかつた者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかつたはずです。(ヨハネ 9,30-33)》と付け加えたのです。この判断は、自分に起こったことの観察の結果であり、経験そのものに内在するものです。しかし、盲人の歩みはここで終わらないのです。《彼らは、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言い返し、彼を外に追い出した。イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。そして彼に出会おうと、「あなたは人の子を信じるか」と言われた。》要注意、ここがもっとも重要な箇所です。この時点では、青年は自分の身に起こった事実と目の前にいる人物の異例性を把握していますが、自分の目の前に立っている「方」(《人の子》)、その事実の実行者を適切な名前では呼ぶことはできませんでした。《彼は答えて言った。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずいた》³⁶これが信仰です。それを可能にしたのは、彼の前にいたキリスト自身のイニシアティブであって、生まれつきの盲人はそれに従ったのです。認めるというこの最後のステップがなければ、少なくともわたしたちのカリスマの特性によるとまだ信仰とは言えません。信仰とは、キリストの現存、キリストの存在を認めることであるとジュッサーニは、疲れ果てるまで繰り返しました。

《そして弟子たちは彼を信じた》

ここで思い起こしたように、わたしたちもまた、最初にキリストに出会った人々と同じ歩みをしなければなりません。これまで学んできたように、カトリックの視点によれば、聖霊の働きは、具体的な証人の仲介、すなわち教会の仲介を、キリストがわたしより前にとらえた人々の仲介を用いるのです。わたしは、キリストの証人の肉体に巡り合うことによってキリストに出会い、彼らを通して、不可能であるはずの自分の根源的な要求への一致を経験します。彼らに対する信頼を理性的に成熟させながら彼らがわたしに伝える告知に対して心を開き、そして、自分の人生との関連性を個人的に確認するのです。若い神学生であったルイジ・ジュッサーニが、ガエターノ・コルティ神父からヨハネ福音書の序文の解説を聞いたとき、彼をとらえた驚きを思い起こしてみましょう。その驚きはその後の彼の人生のすべての瞬間の見え方と感じ方を決定的に変えてしまうほどのものでした。彼は《それ以来、わたしにとって

³⁶ ヨハネ 9,34-38

瞬間は些細なことではなくなった》³⁷と語っています。この言葉は‘*Vita di don Giussani* (ジュッサーニ神父の生涯)’にも記されています。これは、若きジュッサーニの心と知性に "光が灯る" 恵みの出来事でしたが、それは、彼に語りかけていた人、この場合はコルティ神父の言葉を通してもたらされたものです。

ヨハネとアンデレにとって最初に起こったのは、イエスの言葉に対する信仰ではなく、《彼らはイエスが話すのを見ていた》³⁸とジュッサーニ神父が述べているように、むしろ人イエスの惹きつける力でした。生まれつきの盲人にとって、自分の身に起こった奇跡に対する驚きであったように、わたしたちにとって通常最初に起こるのは、出会いの驚きであり、とりわけ心に一致する人の存在の魅力です。こうして魅了されることから始まるのは、前にも述べたように、信仰に至る道のりです。さもなければ、わたしたちは具体的な姿をとったキリストと出会う経験をしたとしても、それは不完全で、貧弱で未熟なままにとどまります。イエスに魅了されながらも、イエスが本当は誰なのか、新しいいのち・人生とは何なのか、イエスがもたらすために来た真のいのちとは何なのかを認めることに心を開かなかった人々はどれだけいたことでしょうか！そして実際、その人々は去っていったのです。

ですから、弟子たちが人イエスに遭遇することによって経験した一致は、わたしたちがキリスト者の仲間と経験する一致（実際、それは同じ類の経験です）のように、驚きと問い（《この人は一体何者なのだろう》）を生じさせ、何度も生じさせるという点において決定的なものです。しかし、それはまだ完全な意味での信仰の経験ではありません。その人が誰であるかを本当に知るために、使徒たちはわたしたちが思い起こしたような歩みをしなければなりません。それは、「彼」を信頼するか、しないかという決断を、必然的に、そして絶えずしなければならない道のりでした。そして同じことがわたしたちにも当てはまります。

わたしたちは皆、ジュッサーニが‘*キリスト教の主張の起源に*’の中で強調しているように、福音書の中で絶えず繰り返される言葉《そして、弟子たちは彼を信じた》を覚えていると思います。この表現は、異なる場面で何度も繰り返されています。しかし、彼らはもう信じていたのではないのか？と問う人もいるでしょう。しかし信仰とは、時間をかけて、共に生活しながら展開していく歩みであり、多くの確認と多くの支えを必要とする《“認識”の道のり》³⁹です。この歩みは常にわたしたちを奥深くへと導き、より豊かな真実、美、善の経験に導くものです。実に、キリストに従って歩むことは、同時に、わたしの心が何に真に飢え渴いているのかを、一層理解できるように導きます。さらに、キリストに従うことによって、わたしは、現存するキリストとの関係がわたしの心を広げ、理性を広げることに少しずつ気づきます。何がわたしの渴きを満たすかが明らかになるからだけでなく、そうすることによって、渴きそのものに対する理解がますます清められるからです。このようにしてわたしは教育される、という言い方が正しいでしょう。

ですから、ジュッサーニは教育の緊急性を強調するのです。さもなければ、わたしたちはほとんど気づかないうちに、自分たちに構造的に備わっている明確な事実や要求の矮小化した意識に閉じ込められ、主観主義的な心の使い方（つまり、感じたことが判断の基準になる）に陥ってしまいます。その結果は、皆知っているように、《すべての人は同じ心を持っている一心を成している要求はどの人にも同じであ

³⁷ A.Savorana, *Vita di don Giussani*, op. cit., p.47 逐語訳

³⁸ L. Giussani, *Si può vivere così?*, op. cit., p. 322 逐語訳

³⁹ ルイジ・ジュッサーニ, *キリスト教の主張の起源に*, ドン・ボスコ社, 東京 2015 p.69.

る一だが、教育されていない人は…！物理学で使う“クインケ共振器”というものを知っている？音叉やトーラを叩いて振動させ、それをこの7、8本の管の前に置くと、音の波長に対応する管が共鳴する。だから、もし心のこれらの要求が成長させられ、教育されていなければ、多くの人が感じないように、その人は“でも、わたしはそんな要求感じないよ！”と答えるかもしれない》⁴⁰とジュッサーニは言っています。

3. 信仰の経験

新しい深み

信仰は時間の中で、人間の能力や感情、あるいは自然な宗教的はずみだけでは不可能な、より深いレベルの経験、つまり物事に対する理解や味わいをわたしたちにもたらしめます。これは、キリスト教的経験そのものを排除したり、矮小化したりしてしまう恐れがあるので、今、踏み込んで注視する必要があります。人間的には想像もできないような痛みや死に対する立ち向かい方を証している多くの友人たちのことを思い浮かべています。彼らは何かにとりつかれた人でも、現実離れした狂信者でもありません。そうではありません。苦しみの中にあっても究極の喜びを味わうことができるのは、彼らの力ではなく、信仰によって可能になっているのです。自分自身の肉体の苦しみを、あるいはキリストの苦しみを共有する愛する人の苦しみを認めることができるのは、信仰によってのみできることです。彼らは実際に体験しているのですが、それは信仰の恵みなしでは受け入れられないものです。前に述べたように、信仰は、ある面では、出会いの中で経験した一致によって支えられていますが、別の面では、人が決して選ばないようなものさえも含む新しい一致の経験へ導く扉なのです。

ジュッサーニ神父は、‘*Alla ricerca del volto umano (人間の顔を探し求めて)*’の中で、《聖パウロは“すべてを吟味して、良いものを大事にしてください”（1テサ5,21）と教えている。価値を吟味するもの、判断するものは、もはやわたしたちの基礎的経験の混乱と謎の深みであってはならない。基礎的経験は豊かではあるが、まだ混乱しており、必要や関心事、根源的要求を読み取りにくい状態にある。謎というものは人間を常に落ち着かない状態させる。人に判断をさせ、この価値を響かせるのは、キリストに目を向けることである。つまり、わたしたちの人間性を創造された神の決定的な言葉であるキリストを見つめることである》⁴¹と説明しています。

それは、ジュッサーニ神父が愛した表現を用いるなら、単にその日は普段よりキリストを思い、いつも以上に《キリストを見つめる》⁴²恵みを受けたから、不思議な喜びを持って、犠牲を受け入れたり、被った意地悪を赦したりできるようなものです。経験と信仰の関係は、ほぼ円を描くようなものと言えます。“ほぼ”と言ったのは、よく見ると、それは前進であり、すべてを新たな深みへと導く道だからです。つまり魅了される経験から信仰が生じ、信仰から新たな経験が、信仰なしでは受け入れがたい新たな“魅力”が生じるのです。

福音書のサマリアの女、誰にも見られたことがないようまなざしで見つめられ、かつてないほど自

⁴⁰ L. Giussani, 《Tu》 (o dell'amicizia), Bur, Milano 1997, p. 51. 逐語訳

⁴¹ L. Giussani, *Alla ricerca del volto umano*, Bur, Milano 2007, p. 78 逐語訳

⁴² L. Giussani, *La convenienza umana della fede*, Bur, Milano 2018, p. 136 逐語訳

分のことを知っている人を見出したこの女性のエピソードを考えてみましょう。もしある時点で、家に帰るとき、キリストの恵みによって、あの男が単に神から遣わされた預言者ではなく、人となられた神そのものであり、彼女に会うために砂漠を疲れ果てるまで歩いてきた神そのものである—これが信仰の判断です！—という判断に至らなかったとしたら、彼女は自分が他の者より好まれたという「底知れない深み」を理解することはできなかつたでしょう。彼女は、すべての経験の中でもっとも心に一致する経験を逃していたでしょう。もし彼女が、目に見えないもの、直接的な経験では得られないものを信じなかつたなら、自分に与えられた贈り物を完全に味わうこと、つまり—逆説的に—完全に経験することはできなかつたでしょう。その「存在」との出会いは、懐かしく振り返る美しい思い出として記憶に残るだけで終わつたに違いありません。

昨年いろいろな共同体を訪問して印象に残つたのは、わたしたちの間でキリスト教的経験について語る時、まるで信仰はそれとは何の関係もなく、その真の深さを決定することもなく、その広がりを与えるものではないかのように、それは測定できるもの、現実が心に与える影響から生じるもの、*自然な経験*に矮小化される傾向にあるようだということでした。ジュッサーニ神父は第三の要因を《わたしたちの人生に対してイニシアティブをとるのは「他者」であり、こうしてわたしたちの人生を救い、真実の認識へと導き、現実に従うよう導き、真実に愛着を持つよう導き、現実への愛へと導くのは「他者」である。「他者」なのである》と語り表しています。すなわち、《「他者」がわたしと現実との間に入り込み、わたしと現実との関係を可能にしてくれることを受け入れる》⁴³ことです。従って、キリスト教の経験を次の2つの要素だけに矮小化する可能性を避けなければなりません。一つは心の要求（幸福、美、愛）であり、もう一つは瞬間ごとに起こることとしての現実で、それが心に“与える影響”です。もし、この2つの要素しか存在しなかつたら、ヨーネ・カラスコーザが7-8月号の『*Tracce*』の中で自分に起こったことを分かち合いながら、わたしたちに示したような判断を下すことは不可能であり、愚かであるとさえ言えます。皆さんも知っているように、1年以上前、彼女はある感染症に罹つた結果として、ギラン・バレー症候群を引き起こし、数時間で徐々に身体全体が麻痺に陥つたのです。《突然、体中のいたるところに管がつながれている自分に気づきました。“わたしはいったい誰なの？”[…] 集中治療室は不快な場所で、ジュッサーニ神父が闘病中に耐えていた苦しみの数々を思い出させられました。彼はとても現実的な人だったので、嫌な一日を過ごした後、ありのままを話すと同時に、いつもそれらを超えるものに目を留めていました。彼のことを思い出しながら、わたしは“今、自分の居場所はどこ？”と自問しました。彼の現実的な見方に従って、わたしはすぐに“これが十字架というものだ”と言えたのです。そして、ジュッサーニ神父がよく『主がわたしたちに与えられる状況は、わたしたちの召し出しにとって不可欠な要素である』と言っていたことを思い出しました。十字架に忠実であることは、キリストを知ることにつながり、それはキリストの復活をより深く理解し、経験することにつながる認識でした。わたしがこのことを理解したのは、平和を経験し始めたからです。[…] 極端な弱さの中に、どうして平安、喜び、幸福が存在できるのだろうか？わたしは体がなく頭だけしかないという感覚だったのに、どうして平安、喜び、幸福を感じる事が可能なのだろうか？“あなたたちの顔に見られる喜びによって、彼らは「わたし」を知るでしょう”これがまさにわたしに起こったことです。わたしは話することができなかつたので沈黙のうちの宣教になり、目だけで友達を作ることができると驚きました。

⁴³ L. Giussani, *In cammino (1992-1998)*, Bur, Milano 2014, pp. 193-194 逐語訳

[...] どうしてそんなことができたのか？ どうしてかは分からないのでわたしに聞かないでください。けれども、「誰」がしたのかは知っています》⁴⁴。

彼女の証言に感銘を受けたので、この年度始めの日、この体験談を皆さんに繰り返し語ってもらおうと思い、今日、マドリッドからビデオ中継で参加してもらいます。

ビデオを視聴

ここに記されている判断は信仰から生じているもので、キリストとの関わりを認めて生きていることから生じるものです。ヨーネが証言した経験は、二千年前に十字架に釘付けにされた人イエスが神の子であり、その苦しみは歴史上もっとも偉大で有益な愛の行為に変えられたという事実に対する確信、恵みによって彼女に与えられた確信に根ざしています。そして第二に、キリストの受難と死が起こったその日からすべての苦しみは、もし捧げものになるなら、同じように神秘的な実りをもたらすという事実に対する確信に根ざしているのです。この判断がなければ、彼女が経験したことをあのように表現することは不可能であり、意味をなさなかったでしょう。ヨーネは自分の身に起こっていたことからだけでその判断に至ったのではなく、運動との出会い、すなわちキリストとの出会いから始まった信仰の歩みによるものです。ヨーネがこのような経験—経験、つまり実際に《感じること》《見ること》—ができたのはキリストへの信仰によるもの、すなわち、ナザレの人イエスが、真に教会が主張するイエスであるという確信があったからです。信仰は経験の深みへとわたしたちの心を広げますが、信仰がなければその深みには到達できません。

この「存在」が自分自身について語ったこと、そして教会の伝統を通してわたしにも伝えられたことへの信仰は、苦難や犠牲、あるいは単に妻や夫との関係で生じる摩擦、子供の気まぐれ、わたしを悩ませる同僚などに対するわたしの見方を変える力があります。

実のところ、もし信仰による判断、信仰がなければ到達できない信仰を基とした判断に至らないなら、わたしは自分の心にもっとも一致する経験をすることができません。すなわち、あらゆる状況において、わたしに対する神の愛、深いと同時に人間的な愛に、驚きをもって気づくことさえできないのです。わたしは最良のことを失ってしまうでしょう。

わたしの登山経験から、もうひとつ例を挙げてみたいと思います。一見して滑らかで登ることは無理だと思える岩壁を前にしていると想像しましょう。慣れない登山者にとって、その岩壁を登ることは不可能に思え、がっかりして家に帰るでしょう。しかし、慣れ親しんだ目にとっては、とるに足らないわずかな岩の割れ目は、転落することなく体重を支えることのできる足場になります。こうして、進むことが不可能に思えるような場所でも、進むことができるのです。生きた信仰は、わたしたちに同じような効果をもたらし、“ふつうの”目には見えないけれど、見るべきものが見えるようにします。それは、ジュッサーニがわたしたちに百倍と呼ぶように教えてくれたものを味わうためです。つまり、すべての状況、あらゆる顔やものの中に「神秘」を見出すことです。ジュッサーニ自身が《わたしは君たちが見ているものを見ているが、君たちはわたしが見ているものを見えていない！》⁴⁵と言ったように。

⁴⁴ J. Carrascosa, «Il mondo in una stanza», *Tracce*, n. 7/2023, pp. 21-22. 逐語訳

⁴⁵ L. Giussani, *L'attrattiva Gesù*, op. cit., p. 15 逐語訳

人生・いのち・生活を形づくる信仰

これらすべてが現実のものであり、個人の経験、目に見え体で感じとれるほど影響を与えるということを理解することが重要です。《信仰は […] 人生・いのち・生活を形づくる》⁴⁶とマウロ・ジュゼッペ・レポリ神父はフラテルニタの黙想会で言われました。そして、キリストの生きた体に属する人々の人生・いのち・生活を形づくることによって、ヘブライ人への手紙の中に出てくる《証人の雲》を広げます。ガリラヤの埃っぽい道を歩き、説教し、並外れたことを行なったイエスに出会った人々のように、過去のことだけではなく、現代のわたしたちも見ることができ、従うことのできる生きた雲です。わたしたちもまた、信仰がもたらす新しい人生を生きる人々の証言によって、驚くべきことが起こっているのを目の当たりにします。そのことをヨーネから聞いたばかりです。しかし、この夏、わたしたちが聞いたもの以外に *Tracce* (あしあとのイタリア版) に絶えず届く多くの証言の中にも、それを証明するものがあります。そのいくつかは、CL のウェブサイトや雑誌に掲載されているので読むことができます。

これは新しい判断、信仰そのものから生じる独自の判断であり、物事に対する新しい認識であり、わたしたちの能力を超える現実への立ち向かい方を可能にしてくれるものです。

では、しばしば危機に陥り、試練の中で人生を支えることのできる具体的な確信の源である信仰を失ったと感じる際に、わたしたちが格闘している問題は何なのでしょう。

レポリ神父は黙想会で《“信仰が失われるのではなく、信仰が生活をただ諷すことを止めるだけだ”。つまり内側から人生・いのち・生活に形を与えることを止めるのです。In-formare (英語 inform) とは、語源的には、単に“知らせを与える”という意味以前に、“内側から形を与える”、“内側を形作る”という意味があります。[…]実際、信仰というのはまさに人生・いのち・生活を形づくる、形を与える役割があるのです。信仰が何に役に立つのかが理解できるのは、人生・いのち・生活を形づくる場合だけです。信仰にのみ与え得る形を人生・いのち・生活に与える場合です。信仰を脇に置くことは、信仰を無用なものにしてしまいます》⁴⁷と言われました。

4. わたしたちを教育する仲間

ヨーネがわたしたちに伝え、他の多くの友人たちがわたしたちに伝えてくれるような、深い信仰を静かに生きるというこのうらやましい経験をするための道、つまり主要な道とはどのようなものなのでしょうか。ある意味で、それについてはすでに話しました。つまり、これらすべては、信仰そのものがわたしたちに与えてくれる新しいまなざし(見方)によって可能になります。同時に、このまなざしは、純粋な恵みの出来事によってわたしたちに与えられるとは言え、他の器官と同じように、訓練され、教育されなければならないことも同じように真実なのです。登山家が山を登るすべを心得ているからこそ、足場を見つけ、そこにしがみつくことができるのと同じように、信仰の目も教育されなければなりません。「しごと」、苦行が必要です。しかし、人は自分自身を教育することはできません。人には場所と仲間が必要なのです。

⁴⁶ M.-G. Lepori, *Gli occhi fissi su Gesù, origine e compimento della fede*, Ed. Nuovo Mondo, Milano 2023, p. 45 逐語訳

⁴⁷ 同上, p. 46 逐語訳

ここでベネディクト十六世の素晴らしい言葉を読みたいと思います。《わたしはイエスとのわたし的な対話の中で個人の信仰を築くことはできません。信仰は、教会という信者の共同体を通じて神からわたしに与えられるからです。信仰は多くの信者の交わりの中にわたしを導き入れます。この交わりは、単に社会的なものではなく、神の永遠の愛に根ざしています。神は、ご自身において、父と子と聖霊の交わりだからです。三位一体の愛だからです。わたしたちの信仰が真の意味で個人的なものとなるには、それは共同体的なものでもなければならぬのです。信仰がわたしの信仰となるには、信仰が教会という「わたしたち」の中で生き、動いていなければならないのです。信仰は、わたしたちの信仰、すなわち唯一の教会の共通の信仰でなければならないのです。[….]こうしてわたしたちの「自己」は教会という「わたしたち」の中で、自らを超える出来事の受け手、また伝え手であることを感じられるようになります。》⁴⁸

わたしたちは一つの道を歩んでいます。わたしたちが話してきたまなざしに入るための道は、帰属することです。真の苦行とは、信頼することであり、一人では行きつくことのできないところへ導く共同体に包まれることを受け入れることです。

仲間は、わたしたちをこの新しいまなざしへと教育する道です。出会いによって導かれた道のりを歩むことは、教育されることを受け入れることなのです。この道のりを歩むためには、当然ながら自由も伴います。自由の動きが必要です。つまり、謙遜または福音書で《心の貧しさ》と呼ばれる態度です。

現代社会は、自由でありたいければ、すべてを自分で判断し、誰にもプライベートな空間を侵されてはならないと言います。残念ながら、わたしたちもそう考える誘惑に陥ることがあります。わたしたちはその逆のことを言っています。自己を解放するのは交わりだと言うのです（ですから、わたしたちの運動の名前は《コムニオーネ エ リベラツィオーネ（交わりと解放）》と呼びます）。実際、神秘が働く方法とはどのようなものでしょうか？《御父が働く方法はキリスト、つまり教会、すなわち、わたしたちの間の交わりである。子供たちが遊ぶ紙くずのように、わたしたちが使っているこれらの言葉に、なんとという永遠の重み、なんとという無限の価値、なんとという濃密な深さが含まれていることか》⁴⁹とジュッサーニは言っています。

要するに、信仰から生まれる新しいまなざしを持つために、自分で自分の視点を変えるわけではないのです。このことについてジュッサーニの言っていることを聞きましょう。《ある出会い。つまり、あなたはこの仲間に出会ったのである。これは、イエスの神秘、イエスが、歴史におけるイエスの存在が、あなたの家のドアを叩いた方法である。今—今！—も同じように叩いている。彼は“昨日も、今も、いつも”（〈イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方です〉へブライ 13,8）だからだ。この仲間に従うことによって、つまり、この仲間が考えるように人生を考えようとすることによって、この仲間が誘発するように、この仲間が提案するように、この仲間があなたに模範を示すように、人間関係を感じようとするによって、あなたは自分自身になるのだ（だからこそ、先輩、あるいは権威のある人が重要なのだ）。従うなら、この仲間の特徴を自分のものにするなら、異議“わたしはわたしだ！なぜこの人たちに従わなければならないのか？”とか、“わたしは道徳的な基準には従うが、彼らの勧めには従わない。たとえば、彼らはもっとも美しく、もっとも人間的で、もっとも効果的で、

⁴⁸ 教皇ベネディクト十六世, 一般謁見演説, 2012年10月31日, カトリック中央協議会

⁴⁹ L. Giussani, *Fede è riconoscere una presenza*, Appunti da una conversazione di Luigi Giussani con un gruppo di adulti, Milano, 1977, inserto in *Litterae Communionis-Tracce*, n. 11/2000, p. IV 逐語訳

もっとも説得力のある祈りは典礼だと勧める。けれども、わたしはそうは思わない。私的な祈りを称賛する他の人たちに従う”と抗議しないなら、あなたはあなた自身になる。神に賛美を捧げる方法は 2 つあるが、もしあなたがこの仲間に出会ったなら、それに従おうとし、わたしたちと、わたしたちが生きている経験と自分を重ねるようにするべきである。このことはあなたの人相、性格、個性を引き立てる。だから、問題は特定のルールを守るのではなく、ある精神、物の見方、感性に同調することである。つまり、広い意味で、あるカリスマに、人となられた神の神秘が説得力を持ってあなたに触れ、“来なさい！”と呼びかける方法を身に着けることなのだ。》⁵⁰

しかし、もしそれが本当なら、誰かは《はい、わかりました。けれども、もし言われることがわたしの心に一致しないなら、なぜ従わなければならないのか？》と反論するかもしれません。この場合、一致というのは提案されたこととその提案がされた方法に対するものと理解します。または《わたしには理解できない》というのも別の反論の仕方です。これらの反論に対してわたしは、すべてを理解していなくても、従うことは理性的だと答えます。これは、先ほどジュッサーニから聞いたことの結果です。つまり、自分の理性を否定して、心を否定して従うという意味ではありません。そうであるなら、それは自己疎外になってしまうからです。開かれた心というのは信仰主義とは違い、わたしになされた提案は常に確認—確認！—をする機会が与えられています。しかし、その確認をするためには、まず、それを肯定的な仮説として受け止めて、わたしに提案した人を信用しなければなりません。何かが一致しないように感じ、危機に陥りそうなときでも、従うのはなぜでしょうか？それは、出会ったものに忠実であるため、すなわち、イエスの神秘がわたしの家やあなたの家のドアをノックした方法に忠実であるためです。ではなぜ、その出会いに忠実であるためにわたしは、他の人々ではなく、まさにこの人々に従わなければならないのでしょうか？忠実であるのは、究極的には彼らに対してではなく、この運命に導く具体的な仲間の中にいる「あの方」に対するものだからです。わたしたち一人ひとりが冒すかもしれないあらゆる過ちを超えて、現存し続け、ご自身こそが人生に対する唯一の答えであることを証明する方に対するものです。《主よ、わたしたちは[あなたから離れて行くなら]だれのところへ行きましょうか。あなた[だけが]は永遠の命の言葉を持っておられます。》⁵¹

5. 信仰から宣教

信仰から生まれた新しいまなざしの頂点は、わたしの人生を満たしているのと同じ「出来事」によって、他の人も満たされることを切望しながらその人を見つめることです。それを宣教といいます。10月15日の謁見で教皇はこの言葉を繰り返し、演説の最後の部分をすべてこの言葉に当てられました。

モンシニョール・パオロ・マルティネッリは、8月の国際責任者会議で《わたしは、派遣されるということは、まず、常に「誰か」によって遣わされているということなのだと学んでいます。つまり、派遣されるというのは、あなたを派遣してくださる方と深く結びついている場合にのみ可能なことなのです。このことを忘れて、すぐに宣教の意味を失ってしまいます。そうすると自分自身の意味は無くなるのです》とわたしたちに語られました。

⁵⁰ L. Giussani, *Dal temperamento un metodo*, Bur, Milano 2002, pp. 7-8 逐語訳

⁵¹ ヨハネ 6,68

宣教とは、あなたが呼ばれている場所であり、その展開は神が望まれていることです。そうでなければ宣教ではありません。宣教とは、あなたを遣わす「方」がおられるということです。あなたの功績によらず、あなたを好まれた「方」が、出会いによってあなたを選び、その方をすべての人に知らせるために、あなたは選ばれました。その目的のためにあなたは選ばれたのです。ですから、もし主がこの目的のためにあなたを選ばれたのなら、もし主があなたを呼ばれたのなら—召し出し—、そして呼ばれたことが遣わされたことと一致するのなら、このことが示すのは、あなたが今いる場所に、自分のためだけに、自分の計画のためだけに、自分の利益のためだけに、自分が得られる最大限のものを得るためだけにそこにいるのではないということです。あなたがそこにいることを望まれる「誰か」に応えるために、「誰か」に遣わされたからあなたはそこにいるのです。その「方」を認め受け入れるなら、「彼」があなたにもたらす変化によって、あなたを通して「彼」自身が人々に知られることを望まれるのです。

この意識を持つことが、わたしたちにとって宣教の始まりなのです。たとえば、世界のもっとも考えられないような場所に仕事のために身を置いている人たちがこうした意識を持つなら、そこにいる彼らの態度をどのように変えることができるかを考えてみましょう。確かに仕事のためにそこにいるのですが、もはや仕事のためだけにそこにいるのではなく、自分の人生・いのち・生活を通して他の人々がキリストに出会い、キリストを知ることができるためなのです。そうした意識は仕事への取り組み方や置かれた状況への立ち向かい方にも影響します。

6. 自由は願うことに関わる

このすべてのことは、初めから終わりまで、「他者」がイニシアティブを取られることによって可能となります。恵みは、最初だけでなく、ましてや最後だけでもなく、道のりのすべての段階で優位を占めるのです。ですから、わたしたちが話してきた新しい経験にわたしを導くのは恵みなのです。しかし、前に言ったように、わたしたちの自由にも関わります。願いとして。

*'Si può (veramente?) vivere così? (人は (本当に) このように生きることができるか?)'*の一節は、別の言葉でこのことを繰り返し、ここでしてきた歩みを要約しています。

Memores Domini で修練を始めたある人が、ジュッサーニ神父に《現実との関係の中でキリストを愛することを学びますが、自分の人生・いのちは一人の人、キリストに捧げるべきだと理解しながらも、わたしは汎神論の危険にさらされています》。彼は《これはまったく抽象的な仮説であり、言葉の羅列に過ぎない。キリストを愛することを学ぶのは、キリストがあなたに自身を表すからだ。残念ながら、ここにいる皆は、「他者」のイニシアティブの対象となったのだ！あなたたちをここに導いた機会は自分たちで選んだものではない！よって、そのことを思い出さないというのは常に感謝の心を忘れることであり、さらに悪いことは呼ばれたことを放棄することだ。人はキリストの存在を認めることによって、「彼」を愛することを学ぶのだ。それは恵みだ。キリストの存在と同様に、キリストを認めることも恵みだ。この恵みを受けたわたしたちが成長することによって願うようになるのだ。コルベ神父は、殺された地下壕の中にいた時、あの恐ろしい時間の中で、祈りながら、神学校で神学を学んでいた時よりもどれほど深くキリストと結ばれ、彼を知るようになったことだろう！現実を知ることによってキリストを知るのではない。なぜなら、現実との結びつきがないからだ。キリストを知ることによって、人は現

実を知るのだ。そして、人はキリストを願い求めることによって、キリストをより深く知るのだ》⁵²と質問を覆しながら答えます。

明らかに、ここでジュッサーニは、キリストと現実を対立させているのではなく、キリストへの道筋としての現実との関係を過小評価しているのでもありません。キリストがイニシアティブをとって自身を表す場合にのみ、わたしたちはキリストを《愛する》ことができるということを強調しようとしているのです。キリストを知ること、キリストの神性を知することは、理性的な探求の結果ではなく、贈り物なのです。わたしたちは贈り物の対象なのです。

1977年にミラノでジュッサーニ神父が成人たちとの対話の中で用いた言葉は、今日のわたしたちに向けられたもののように感じるから、その言葉で締めくくります。《わたしはあなた方に話せることを喜んでいる。この喜びは、わたしの限界の重さのすべて、罪の意識の重さのすべてを、困難であっても貫かなければならない。けれども、それは講演をするためではなく、いのちであるこれらの言葉を伝えるため、そしてもう一度伝えるためだ。抽象的で一般的な意味、定義としてのいのちではなく、あなたのことだ。これらの言葉はあなたであり、あなた的人格であり、あなたのお母さんの胎内で神が生じさせたエネルギーが流れている運命であり、あなたの名前を持つ運命なのだ。しかし、そのエネルギーの意味はあなたの名前ではない。なぜなら、あなたの本当の名前は別のものだからだ。それは、あなたに与えられた信仰だ》⁵³。

Traduzione di: Marcia Akemi Kaida / Tomoko Sadahiro

© 2023 Fraternità di Comunione e Liberazione.

表紙の写真：生まれつきの盲人の奇跡、フレスコ画、11世紀、サンタンジェロ・イン・フォルミス（カゼルタ）のベネディクト修道院聖堂

© Don Francesco Duonnolo

⁵² L. Giussani, *Si può (veramente ?!) vivere così?*, op. cit., p. 572 逐語訳

⁵³ L. Giussani, *Fede è riconoscere una presenza*, op. cit., p. II. 逐語訳